



｜ 特集 ｜

地域の季節を表した 和菓子をつくろう

和菓子のデザインは、全国で広く取り組まれている題材の一つです。
この題材で、生徒一人一人の感性を磨き、発想・構想の力を高めるには、
どのような授業が考えられるのでしょうか。

撮影 鈴木俊介 (P5右下写真を除く)

授業レポート

秋田県大仙市立西仙北中学校

田中真二郎先生 × 2年生
(A・B・C組各25名)

古来、和菓子は季節感を豊かに盛り込み、四季折々の日本の美しさを表現してきた。今回の授業では、そうした和菓子ならではの特徴に学び、自分たちの地域の季節を表した模型づくりを行う。生徒は、自分たちの地域にどのようなよさや美しさを見だし、それらにどのような色や形を与えたのだろうか。

第1時 和菓子って何だろう？

「甘いもの、好きな人？」「和菓子が好きな人？」「ケーキが好きな人は？」。田中先生が矢継ぎ早に質問を投げかける。生徒たちはとまどいながらも次々と手を挙げていく。「カステラって、和菓子？ それとも洋菓子？」と首をかしげる生徒もいる。先生はすかさず、和菓子の種類、駄菓子や洋菓子との違い、食べる時のシチュエーションについて問いかけることで、「和菓子」の概念を生徒たちと共有していった。

「これから、自分で考えた和菓子をつくっていきます」と宣言した後、

先生が取り出したのは、和菓子のアートカード。一つ一つ異なる和菓子のイラストが描かれた12枚のカードを「ある順番」に並べてみようというのだ。「季節」で分けられそうだと試行錯誤する生徒たち。先生は、これらが1月から12月までの和菓子を表すことを伝え、それぞれ何月の和菓子なのか考えるよう促す。生徒たちはしだいに、季節による和菓子の「形」や「色」の違いに注目していった。

ここで先生が問いかける。「季節ごとに多様な和菓子がつくられるのは、なぜだろう？」。生徒たちがつぶやく。「月ごとにお菓子が変わっていくから、それが楽しみになる」「日本には独特な季節の特徴があって、色彩が豊かだから」「昔から日本人は季節を彩り、味わってきたので、和菓子もそうなのだと思う」。

ここでは結論を急がず、「では味わって考えてみましょう」と、グループに一つずつ、「紫陽花^{あじさい}」を表した本物の和菓子を配る。すぐに食べようとする生徒たちに、先生は、「見



「こんなにさまざまな季節を表した和菓子がつくられてきたのは、なぜだろう」と問いかける田中真二郎先生。

た目」をよく観察するよう促した。それから、切ってみたときの「感触」と「匂い」。最後に、食べたときの「味」。生徒たちは、感じたことを言葉にしていく。それらを黒板に書き留めた先生は、それぞれ和菓子を楽しむときに使う「視覚」「触覚」「嗅覚」「味覚」に分類した後、「では聴覚は？」と尋ねる。生徒は答えに困りながらも、先生からのヒントを手がかりに、和菓子には「名前」があり、それを耳で聴いて楽しむことができる気づいていった。

その後、先生が見せたのは、ある著名な和菓子職人のインタビュー映像^(※1)だ。一流の職人の哲学とその手から生み出される和菓子の美しさに生徒は息をのみ、ただ静かに見つめ、聴き入る。職人の姿と言葉からも、五感を大切にしていることがうかがえる。「和菓子は五感で楽しむものなのですね」と、先生。生徒たちは答える。「口の中で味わいなが



左／アートカードに描かれた和菓子のモチーフをヒントにしながら、どの季節に合わせたものなのかを考える。
右／グループごとに配られた和菓子の形を崩さないように、そっと切り分ける。

※1 NHK Eテレの番組「JAPANGLE」の「#9 お菓子」の回で取り上げられている和菓子職人・水上力氏のインタビューと制作風景の映像。現在、「NHK for School」のサイト内で閲覧することができる。

ら、見た目に表現された季節も楽しめる」「風景や思いを形としてみんなに伝えるために、いろいろな季節のものがあるのだと思う」「人への愛情や気持ちを伝えるお菓子だと思う」。

自らも五感で和菓子を味わった生徒たちは、和菓子についてより深く考えるようになっていった。

第2～4時

調和の取れた、洗練された美しさ

「西仙北の自然や産物をモチーフに使うこと」「地域の人が食べたいと思うお菓子にすること」。この二つの条件を踏まえて、生徒は本時までに自分が見つけた「西仙北の春夏秋冬」を美術ノートに書いてきている。

田中先生は4枚の大きな模造紙(写真)を取り出し、4グループに1枚ずつ配った。この地域の四季を代表するものを「見えるもの」と「見えないもの」に分けて書き出させる。そして『「冬」の見えないものって?」



「夏」と「秋」の模造紙。色のイメージは、季節によって異なることが見て取れる。

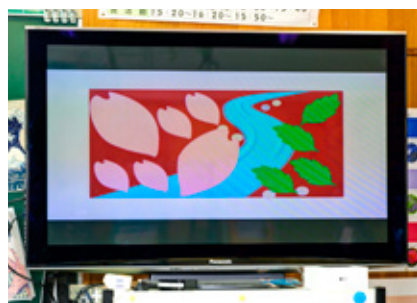
「どんな言葉にできる?」などと問いかけ、自然や文化という「見えなもの」を言葉にすることも促した。

全てのグループから集まった言葉で模造紙がいっぱいになると、それぞれの言葉からイメージした色の色鉛筆でその言葉を囲ませる。さまざまに色づけされた模造紙を黒板に掲げた先生は、それぞれの季節の色の傾向に注目させながら、「季節をイメージする色」があることに気づかせていった。

次は、言葉を形にする練習だ。先

生が『「雨」を簡単な形で描いてみよう』と言うと、生徒たちは悩みながらも思い思いの形を描いていく。水滴や線で表したり、雲や傘と一緒に描いたり、水たまりで示したり——。描いたものを共有しながら先生が強調したのは、「同じテーマでも、感じ方や表し方は違っていい」ということだ。さらに「風」「霧」と、練習を続けながら「それを粘土でつくるにはどうしたらいいか」ということにも意識を向けさせていった。

そして、いよいよアイデアスケッ



※2 先生自作のアイデアスケッチ例。
桜の花びら・葉・川の、三つの要素を盛り込んだ。

チに入ろうというそのときに、先生は「私もスケッチを描いてみました。どうですか?」と、桜と川を描いたアイデアスケッチをモニター(※2)に映して見せた。遠慮がちに、しかし口々に生徒が言う。「何がテーマなのかわからない」「色が派手で和菓子に似合わない」「バランスが悪い」。まさにねらいどおり。「調和が取れていないし、洗練されてもいない」と、先生は言葉をつなぐ。「調和の取れた、洗練された美しさ」は、田中先生が今回の制作で重視しているポイントだ。先生は、職人のつくった和菓子の写真と見比べさせて、それを実感させようとしたのだ。

生徒たちは、美術室にある写真集や書籍、先生が用意した季節の草花などを自由に手に取って発想を膨らませながら、アイデアスケッチにとりかかった。

先生は机間指導を行い、考えあぐねている生徒に具体的なアドバイスをしたり、よい発想のスケッチを全

体で共有したりしていく。凝ったデザインを考えている生徒を見つけると、そのアイデアや美しさを認めたうえで、「和菓子としてたくさんつくるとなると、どうだろう」と、全員に問いかける。「複雑なものをつくるのは、大変だし時間もかかる」と気づいた生徒たちは「シンプルで美しい」デザインを心がけるようになっていった。

＊ ＊ ＊

アイデアスケッチがだいたい描けたころ、先生はその横に「テーマ」を書くよう、生徒に指示した。何を表現したいのか、なぜそのように表現したいのか、表現の意図をはっきりと自覚させるためだ。

その後は、グループでスケッチを

見せ合い、客観的な視点からの意見を交わし合う。意見やアドバイスを付箋に書いてスケッチの横に貼り付けていくのだ。生徒たちは、友達からもらったアドバイスを取捨選択して取り入れながら、最終的なアイデアスケッチを練り上げていった。

第5～8時

職人のようにこだわって

制作の時間を通じて田中先生が伝え続けたのは、「思い描いたイメージを再現するために、妥協せず、『職人のようにこだわりをもつ』』ということだ。制作の中盤にさしかかった第6時には、生徒それぞれが職人になりきって、作品の「こだわりポイント」を美術ノートに書くことで、自分のイメージや意図をより明確にしていた。



◆授業展開 生徒の活動(全9時間)

第1時:導入 「和菓子とは何か」 を捉える

- アートカード、本物の和菓子の鑑賞、和菓子職人のインタビュー映像を通して、和菓子について理解を深める。

第2～4時:発想・構想 多様な情報や 体験をもとに デザインを発想する

- 模造紙を使って、地域の季節感を見いだす。
- アイデアスケッチを交流し、客観的な視点を取り入れる。

第5～8時:制作 材料や用具の 特性を生かしながら 制作する

- 材料や用具を変えて何度も試作を重ね、表現を追究する。
- 制作の途中で「こだわりポイント」を確認する。

第9時:発表・鑑賞 和菓子に込めた 思いを交流し合い、 作品を鑑賞する

- 他者の表現の意図を聞き、感想を交流する。
- 「調和の取れた、洗練された美しさ」について考える。

◆指導計画

準備するもの

生徒 美術ノート、筆記具

教師 軽量粘土・樹脂粘土・レジンなど各種素材、加工・彩色のための各種用具、写真集・書籍など各種資料

学習目標

- 条件に適した形・色彩・材料などの組み合わせを考えながら「洗練された美しさ」を追究して構成を練り、材料や用具の特性を生かして創造的に表現することができる。
- 作品を鑑賞し、生活を豊かに美しくする美術の働きについて理解することができる。

評価規準

- 和菓子を独創的に表現することに関心をもち、主体的に取り組もうとしている。(美術への関心・意欲・態度)
- 故郷の自然や体験を基に発想し、美的感覚を働かせて和菓子の形を考え、形や色彩の効果、材料の特性に気づきながら表現の構想を練っている。(発想や構想の能力)
- 材料や用具の特性に気づき、自分の意図に合う新たな方法を工夫して表現している。(創造的な技能)
- 造形的なよさや美しさ、作者の意図や創造的な表現の工夫を感じ取り、見方を深めている。(鑑賞の能力)
- 作品に込められた自然の美しさを感じ取り、「自然との共生」などの視点から、生活を美しく豊かにする美術の働きについて理解している。(鑑賞の能力)



上／過去の授業で先輩がつくった作品を見て、何を表しているのか考える生徒たち。
左下／友達からの付箋によって、「食べ物としてどうか」など客観的な視点に気づかされる。
右下／季節の草花を手に取り、においをかいでイメージを膨らませる。



| 特集 |
地域の季節を表した
和菓子をつくらう

生徒たちは、これまでに、浮世絵の鑑賞の授業で江戸時代の「職人」について学んでいる。本題材に入ってから、映像や資料を通して和菓子職人の仕事ぶりや考え方に接してきたことで、「職人のこだわり」について、それぞれに受け止め、考えをもつことができているようだった。

＊ ＊ ＊

美術室には、粘土を加工するためのさまざまな用具が用意されている。生徒は、先生に相談したり、友達どうしでアイデアを出し合ったり、用具の使い方を教え合ったりしながら、自分がイメージした色や形や手触りを再現しようと、実験と試作を繰り返していく。



上／やわらかい雰囲気になるように、薄く伸ばした樹脂粘土で求肥のように包む。
左下／おろし器・こし器・絞り口・細工用のはさみなど、和菓子の成形に使えるような用具を自由に選んで使う。
右下／扱いに注意が必要なレジンには、屋外の先生の目の届くところで、使い方を説明したうえで使わせる。

制作の最終段階の時間、先生は「自分が見つけたふるさとのよさが本当に表現できているか」を考えさせることで、生徒たちを創作の原点に立ち返らせた。そして、今回の作品が「自分が見つけたよさを地域の人たちに向けて発信するもの」だということ想起させ、妥協せずに今からでもつくり直してよいと伝える。和菓子の模型という、小さくて時間をかけずに制作できる題材だからこそ、ここまでのこだわりや追究を生徒に求めることができるのだろう。

第9時 和菓子に込めた思い

この時間は、グループに分かれて作品を鑑賞し、それぞれの作品が表す季節とテーマを考え、感想を交流

する。生徒たちは、友達が見つけた「西仙北のよさや美しさ」や工夫の一つ一つに目を輝かせる。そして、自分の表現の意図を語り、それがどう伝わったのか、どんなところが伝わりにくかったのかを振り返っていった。

授業の総まとめとして、最後に田中先生は、「調和の取れた、洗練された美しさ」とは何か、自分の作品をもとに考えてワークシートにまとめさせた。

〈生徒の考え〉

- 昔からの日本人の美意識だと思いました。
- 複雑なものではなく、単純なもののほうが自分の思いや考えが伝わる。その単純なものの色や形が誰にでも伝わるものになったのが、「調和の取れた、洗練された美しさ」だと思う。
- 最初は、どうしたら美しく見えるかということしか考えていなかったけれど、「調和の取れた、洗練された美しさ」を考えるうちに、美しいだけでなく、どう省略してイメージを伝えるかを意識して制作することができました。

＊ ＊ ＊

洗練とは何か、美しさとは何か。生徒は、制作を通して、こうした抽象的概念を感得し、自分なりの「言葉」で語っていた。そして、こだわりをもって制作していくなかで、自分たちが暮らす地域を見つめる目も、研ぎ澄まされてきたようだった。



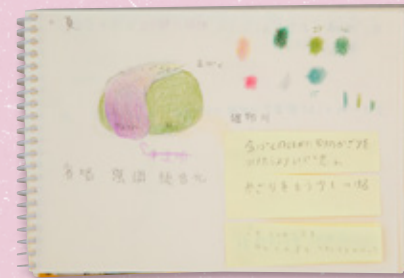
【特集】
地域の季節を表した
和菓子をつくろう

私の「こだわり」

Kさん



お も の が わ
「雄物川」
(春)



春、学校近くを流れる雄物川が光に照らされ、紫に見えて美しかったことを思い出し、それを和菓子にしようと考えた。



「日本らしい色」にしたいと考え、紫は菖蒲色、緑は若竹色に見えるような色をつかった。

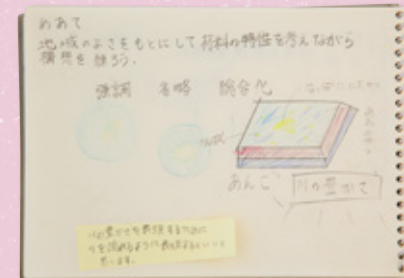
太陽の光が水面に当たって光る様子を金箔で表した。



Sさん



「川のせせらぎ」
(夏)



夏に見た雄物川が太陽と重なってきらきらしていた。その美しさと川の豊かさを表すことにした。



台座の部分は、何度も試作を重ねて、涼しそうな透き通った色を出した。

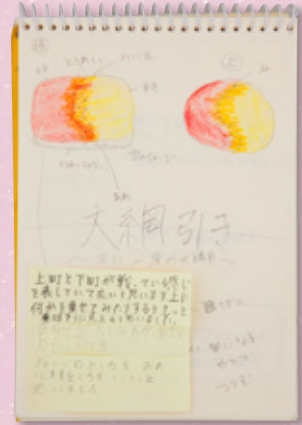
最後に金箔を飾り、きらきらした様子を表現。



Tさん



「冬の大勝負」
(冬)



刈和野の大綱引き(※3)の熱気を二つのチームカラー(黄・赤)で表そうと考えた。あえて「綱」の形にしないのがこだわり。



おいしく見せるために丸い形を選び、レジンで試作。苦労してつくったが、形や色がイメージに合わないと考え、樹脂粘土でも試すことに。

樹脂粘土で丸くふくらした形に。粘土を削ってつくった白い粉と金箔をあしらって完成。



※3 刈和野の大綱引き 毎年2月、本校の学区である大仙市刈和野で行われる大綱引き。上町(二日町)と下町(五日町)に分かれ、大綱を引き合う。

自分流『枕草子』

和菓子

今回の授業と並行して行われたのが、「ふるさとの四季を『枕草子』風に文章で表現する」という国語の授業。国語の時間に書いた「自分流『枕草子』」を生かして発想を膨らませた作品をご紹介します。



Gさん「夕暮れの空」
(初夏)

帰り道に見えた夕暮れを、雲をイメージした白色から、夕暮れのオレンジ色へのグラデーションで表現。ラメは、夕日の輝きを表す。

夏は夕暮れ。
学校の帰り道を自転車で行く。
空はオレンジ色で、
田んぼに色が映り、
風で水面が光るのがきれい。
木が揺れる音もまるで、
川の水が流れるようで、
趣があつていい。



Sさん「梅雨に潤う葉と花」
(初夏)

色を混ぜすぎないようにして、水面に映る花や草の色を出した。
餡とゼリーの2層にすることで、
西仙北の梅雨の感じを表現。

夏は梅雨。
昼寝のときに聞こえる雨のはいける音は、
言いようもないほど趣深い。
紫陽花や蜘蛛の巣に残るしずくがたいへん美しい。
雨が降り続いて、湿っぽくなるのは好ましくない。
雨が降り終り、雲が去って虹が薄く
かかっているのがしみじみとしたものを感じさせる。
それが水面に映るのはとてもいい。



Tさん「花火」
(夏)

「洗練された美しさ」を意識し、
シンプルな形にすることに。中央の黄色い部分は
花火の中心の光を、金粉は火の粉を表す。

夏は夜空。
ほのかに光っている
小さな星を
眺めるのでもいいが、
強い輝きで彩る花火も、
これもまた
言いようもないほど
趣深い。

授業を終えて ふるさとを誇れるように

地域の創作和菓子づくりは、私が大切にしている授業の一つです。単に美しい和菓子をつくることだけが目的ではありません。生徒にとって、自分たちが暮らす地域を見つめ、身近にある「美」を探したり、地域のよさを新たに発見したりする機会となることも目指しています。

本実践は、5年前から地域の菓子店の協力のもと、生徒がデザインした和菓子を商品化するプロジェクトに発展しています。中学生の視点で見つけた、感じた美しさを、和菓子を食べることで今度は地域の大人に感じてもらう——そうして、地域全体でふるさとを誇れるようになってもらいたいと思うのです。協力してくださる地元企業と一緒に、この地域の「文化」をつくっていきたいと考えています。

日本人として、自然と共に生き、自然を愛でながら遊び心をもって楽しんできたこと。生徒はそこから、豊かな生き方とは何かをそれぞれに感じることでしょう。デジタルな時代だからこそ、自分の諸感覚を働かせてモノをつくる経験を大切にしたいものです。今後も、生徒の実態や時代性に合わせながら、生徒と共に作り、考えていきたいと思います。



田中真二郎
たなか・しんじろう

秋田県生まれ。秋田県大仙市立西仙北中学校教諭。宮城教育大学大学院修了後、宮城県私立高校非常勤講師、秋田県内の公立中学校を経て、2013年4月より現職。教育課程研究指定校（国立教育政策研究所、平成26年～28年度指定）。2012年、博報賞受賞。

授業を参観して

光村図書中学校『美術』の著作者である直江俊雄先生に、今回の授業を参観していただきました。



直江俊雄
なおえ・としお

愛知県生まれ。筑波大学芸術系教授。筑波大学卒業後、東京都内の公立中学校教諭を経て、筑波大学大学院修了。博士（芸術学）。ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ客員研究員などを経て、2014年より現職。共著に『美術教育ハンドブック』（三元社）など。光村図書中学校『美術』教科書の著作者を務める。

響き合う 工房の仲間たち

今回の授業で用いられた指導方法の鍵は、表現過程を導く課題設定に、多面性と相互関連性をもたせたことだといえます。「何でも自由に表してよい」ではありません。「和」菓子とは何か、四季の移り変わりはどのように表せるか、五感を使って楽しむとはどういうことか、ふるさとを表すモチーフは何か、地域の人々にどうアピールするか、言葉を形にできるのか、洗練とは、調和とは……。和菓子をつくるという課題の中で、生徒たちは次々と答えのない問いを投げかけられます。そして、先生は常に「自分はどうか考えるのか」「それを人にどう伝えるのか」という表現活動の根本に立ち返る問いを、投げかけているのです。

この授業の輝きを支えていたのはそれだけではありません。この教室自体が、生徒が互いを認め合い、美術を通して人生を楽しむことを学ぶ場となっているように思いました。教室を見回すと、これまでのプロジェクトで作成した印象的なオブジェや展示、資料コーナー、特殊な材料を扱うスペースなどが、洗練されたカフェやインテリア展示場のように美しく配置されています。

何よりもその居心地のよさは、そ

こにいる人々によって互いに形成されているようでした。生徒たちが「〇〇さんのこれって、すごいね」「ああ、そういうことなんだ」「こうしたんだけど、どう思う」と、当たり前のように、あちらでもこちらでも、互いによいところを指摘したり、意見を求めたりしているのです。先生が「他の生徒の作品のよいところをワークシートに書きましょう」と指示したわけではありません。生徒たちが各自の技術的ブレイクスルーを目指して切磋琢磨する姿は、互いの挑戦を称え合う“創造的な工房”ともいえるような場をつくりだしていました。

このように優れた学習環境としての人間関係は、今回の授業だけで形成されたものではないでしょう。田中先生は、造形作家としての力もあり、技法的には高度なものが教えられますが、授業では生徒が自分で考えた表現をサポートすることに徹しています。一人一人に声をかけ、何を考えているのかを聞き、すぐには助言を与えずに生徒と一緒に考える時間を楽しんでいるように見えました。田中先生の、教育者、美術家、空間デザイナー、あるいは工房親方としての生き方ともいえる日々の振る舞いから、生徒たちは、美術を通して互いを認め合う場をつくることのすばらしさを体感しているのです。



特集 |
地域の季節を表した
和菓子をつくらう